

特集 ①:ミュンヘン・ハイエンドショー

High End 2015 in Munich 出展社レポート

パナソニック㈱ アプライアンス社 ホームエンターテインメント事業部

井谷 哲也

5月14日から17日まで、ミュンヘンで行われた High End 2015 に新生 Technics として初めて出展したので、ここにレポートする。

High End ショーは、ここ数年ですっかりメジャーになり、日本でも多くのマスコミ情報が発信され、JAS Journal にも報告されているのは既知の通りである。主催者発表によると、今年の入場者数は昨年より更に 16%増となり、益々存在感の大きなショーに成長している事を伺わせ、ハイレゾの普及、アナログ復権といったトレンドに乗った業界全体の盛り上がりが見て取れる。

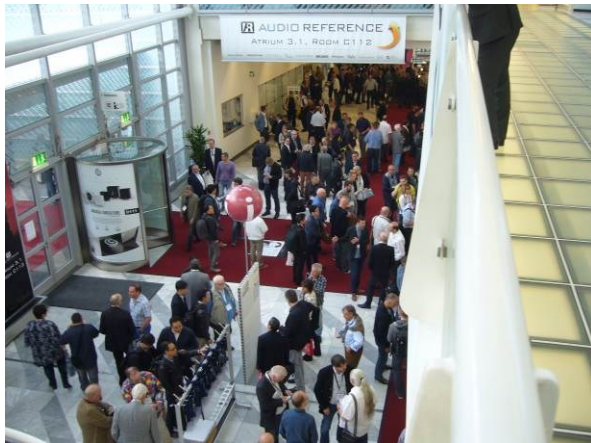


写真1 初日レジストレーション



写真2 広々とした会場空間

見学者は 71 カ国からの来訪があり、その 66%がドイツ国外から。国別で多い順に、英国、イタリア、オーストリア、中国、スイス、フランス、オランダと続き、出展社も 41 カ国の出展で 900 ブランド、500 社以上。そのうち 60%はドイツ国外からで、国別では、米国、英国、イタリア、スイス、フランスの順となる。また来場ジャーナリストも 38 カ国から 504 名で、内 53%がドイツ国外からと、数字的にも国際的なショーである事を示している。日本メーカーの出展や関係者の見学も多く見受けられた。

会場は例年同様に、ミュンヘン市内の中規模の展示会場 MOC (Muenchner Order Center) で、普段はアパレル・ファッション関係に使われる事が多いと言う。その為かどこかセンスの良さが漂う雰囲気も持っている。

High End 2015 には同展示会場の 1 階から 3 階までが使用され、1 階は大きな会場をコマに分割して小規模なブースとして使用。2 階 3 階は、独立した広めの部屋がしつらえてあり、地場の大手メーカーはそれを 2 つ 3 つと使用しているところもあって、全体的にゆったりとしている。

Technics がブースを構えた会場 2 階は、大きなカフェテリアの周囲を囲むように各社ブースがあり見通しが良い場所で、たまたま出あった知人と、腰掛けて気楽に情報交換するといった事も会場も通路も狭い米国 CES での The Venetian や英国 Bristol Show では出来なかった事である。

各社試聴室の設営にはそれぞれのノウハウがある模様だが、CES (The Venetian) や Bristol Show などの様に狭いホテル客室を使ったものでなく、部屋の広さの為、どこのブースでもレベルの高い音でデモができていていると感じた。



写真 3 Technics ブース正面



写真 4 Technics ブース前カフェテリア

また、他のショーと少し異なるのは、開催時間が 10 時から 18 時までである事で、普通より 1 時間長い分、見学者もゆっくりと見ることが出来る。会場は市内中心街からもアクセスが良く、この時期のドイツは日が長く午後 9 時でも明るいくらいなので、それでも十分にアフターワークを楽しむことが出来る。

そういった環境・雰囲気が奏功し、どこの試聴室においても、“じっくり聴き込む”方が多く、ブース見学も時間を掛けて回るお客様が多い模様だ。出展者側もじっくり見聴きできる様配慮したブース作りがなれていると感じた

また、会場には、商品展示ブースだけではなく、レコード（多くはアナログ）の即売コーナーがあったり、会場内通路でライブパフォーマンスなどが行われたり、また中庭に設置されたビアガーデンで、ゆったりと趣味のおしゃべりができたりなど、他の楽しみも提供できる様、主催者の心遣いも感じさせられ、他のショーにはない雰囲気を醸し出しており、世界中から多くのリピーターがあるのも頷ける。

専門メーカーが、これだけ一同に会えるのは地場に多くのメーカーと、堅実な市場を持つ欧州ならではの事で、来場者は一日€12 の入場料（14 歳以下は無料）を払う必要があるにもかかわらず、多くの熱心なファンが詰めかけているのは凄い事だと思う。日本のショーに比べ来場者の年齢層が広く、女性・子供連れなども目立つ。日本のショーだと、如何にも“ご主人に連れて来られた”感がある女性が多いが、こちらの女性はご自身達も積極的にショーを楽しんでおられ、オーディオ文化がより一般の人にも根付いている事を改めて感じさせられた。

日本でもこんなショーができれば良いな、と痛感した次第である。



写真5 アナログレコード即売コーナー



写真6 ブースの前、通路で突然のライブ

Panasonic は過去より毎年、この High End ショーに参加し、Viera や DIGA などホーム AV 機器の展示訴求をメインに行ってきたが、今年から Technics としても参加することになり、Panasonic とは別に独立してブースを構え、多くのお客様に知っていただく機会に恵まれた。

ドイツは Technics にとって過去から重要な市場であり、当時から商品の評価も高く、ファンの方も未だ多くおられる。今回の新生 Technics においても、世界で最初に復活を宣言したのも 2014 年の IFA であり、復活第一弾となるリファレンス(R1) / プレミアム(C700)両シリーズの商品導入もドイツからとなった。

High End 2015 は商品発売以来最初のドイツでの大きな展示会でもある事から、日本の事業部・現地販売会社総力で、R1/C700 両シリーズのハイレゾ音源による試聴コーナーと技術展示、特に復活後に多くのお客様から要望のあった SB-C700 の黒モデルの新製品発表、Technics が欧州で始めた CD クオリティ音源 300 万曲、ハイレゾ音源を 16 万曲の音楽配信サイト Technics TRACKS の訴求などの準備を行った。



写真7 Technic ブース 商品展示



写真8 初公開の SB-C700 黒バージョン

幸いな事に、旧 Technics 時代の経験者が、まだ多く現地販売会社にも在籍しており、彼らのノウハウを持ってブース・試聴室のセットアップと運営を行う事ができ、初回というハンディーを乗り越え、上質な展示ができたと自負している。

余談ではあるが、現地メンバー主体で試聴室を作り音調をした結果、過去のイベント試聴室に比べ、“よりドイツ的な音”に仕上がっていたのは面白いところである。



写真9 Technics TRACKS レジストレーション



写真10 試聴室にて音質確認中の著者

初日は業界関係社の入場がメインで、世界中からマスコミ・ディーラーが多数来訪していた。

我々にとって意外だったのは Technics の再発進が世界的にはまだ認知度が低い事で、特に欧州周辺国のディーラーから、“いつの間に復活したの？”との質問も受けた。IFA、CES 等で十分発信をし続けたつもりであったが、それらでは届ききらない世界がある事を認識させられた。それでも、欧州に加え、中近東、アジア等からのディーラーも多く来訪頂き、“昔 Technics を扱っていたので、また始めたい”との要望も多く受け、営業担当者も対応に追われていた。間口開拓という意味でも成果のあるショーであった。

マスコミ関係も、地元ドイツ以外に、欧州各国、米国、日本、韓国等から多くの来訪があり、Web でも世界中で速報され、Technics のプレゼンスを高めるのに役立った。



写真11 独 Stereo 誌 Matthias Böde 氏



写真12 英国フリー評論家 Andrew Everard 氏



写真 13 英国 Hi-Fi World Mark Osborn 氏



写真 14 多くのディーラーが訪問

日本のマスコミ、評論家先生の多くの方々は最終日まで見学され、ショーの途中途中で情報交換いただき、初めて参加する著者としては非常に助かった。またその方々のご紹介で、業界の著名なエンジニア、経営者の方々と知己を得られた事も個人的には有意義であった。

2日目以降は一般公開で、連日多くのマニアが詰め掛けていた。

Technics 試聴室では、1時間毎のロットで試聴会を設け、ハイレゾ音源を主に試聴頂いた。予約制をとっていたが、毎回満員の状況で、立ち見（聴き）も出、合計400人あまりの方々に新製品群の音をお聴き頂くことができた。デモは大変好評で、試聴の後も試聴室に残って熱心に説明員に質問をしたり、展示物に見入ったりと、ブース内は常に賑わいを見せていた。

また、展示コーナーではカットモデルに常に人だかりが出来ていたのが印象的で、ドイツのファンの方々は“中がどうなっているのかを知りたい”という欲求が他国に比べて強いと感じた。我々以外にも、多くのメーカーがセットの中を見せていた事からもそれが伺える。

Technics TRACKS は、会場でフリーのダウンロードつきレジストレーションを募集したところ、多くの方の登録を頂き、今後欧州におけるダウンロード配信の普及に期待が感じられた。



写真 15 一般公開日は常に満員



写真 16 試聴室も常に満員



写真 17 試聴の後も熱心に質問



写真 18 カットモデルの前には常に人だかり

ドイツは元々Technics ファンを多く持つ地域でもあり、来場者のフィードバックも多くはポジティブなものであった。特に新製品群の音質、デザインについては評価が高く、関係者一同ほっとした次第である。また、一部の熱心な方々からは今後の商品に対する提案も頂き、ファンの皆様の期待の大きさも実感する事ができた。

余談であるが、後日ミュンヘン市内の高級オーディオショップで聞いた話では、High End 2015のTechnics 試聴室で聴いた後、C700を購入されに来店された方がおられたとの事。その他 R1の問い合わせもあった模様で、このショーの影響力の大きさを知らされた。

復活1年目で、手探り状態での出展でもあり、細かな反省点多々あったが、試聴室の音質仕上げも、展示内容もお客様に満足いただけるレベルにまで持っていけることができた。また、その結果として認知度を上げるという初期目的も果たすことが出来、上々のスタートが切れたと自負する。

来年も5月5-8日での開催が決まっており、Technicsは復活2年目として更に商品群を充実させると共に、ブースの設営・運営にも磨きを掛けて参加する予定である。

著者プロフィール



1980年松下電器産業（現パナソニック）株式会社入社。
CDプレーヤー、レーザーディスクプレーヤー、DVDプレーヤー、
BDレコーダ等の商品開発を経て現職。

現職：パナソニック(株)、アプライアンス社、
ホームエンターテインメント事業部、
テクニクス事業推進室、CTO/チーフエンジニア。